

平成28年度国立天文台研究集会（NAOJシンポジウム）開催報告書

平成29年 4月21日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) くさの かんや			
		草野 完也			
	所属・職	名古屋大学宇宙地球環境研究所			
	電話	052-747-6337	E-mail	kusano@nagoya-u.jp	
研究集会名	第4回NAOJシンポジウム ～第10回ひので科学会議～				
開催期間	平成28年 9月 5日 ～ 28年 9月 9日				
開催場所	名古屋大学 理学南館 坂田・平田ホール				
参加人数	153名				
研究集会の概要	第10回ひので科学会議(+Solar-C meeting)は、9月5日から9月9日の日程で、名古屋大学理学南館坂田・平田ホールにおいて開催されました。ひので衛星の科学国際会議は日米欧の持ち回りで毎年開催されていますが、今回は、特に10回目の科学会議として、10年間の成果をとりまとめ、新たな研究への指針を与えるマイルストーンとして実施されました。この会議は、名古屋大学宇宙地球環境研究所の共同研究集会としても認められており、全国の太陽研究者の協力によって運営されました。科学組織委員長は櫻井隆（国立天文台名誉教授）、開催地組織委員長は、名古屋大学宇宙地球環境研究所の草野完也教授(申請者)が務めました。 この会議では、日本、米国、英国をはじめ、ノルウェー、スペイン、ドイツ、ロシア、チェコ、フランス、インド、中国、韓国などから、英国で開催された第9回の会議よりもはるかに多い150名を超える世界の太陽研究者が参加しました。 会議は、口頭セッション(シングルセッション)とポスターセッションで構成され、口頭セッションは、以下のような流れで行われました。講演総数は、口頭講演が41件、ポスター講演が120件でした。 ① 「ひので」衛星10年の成果のレビュー ② 「ひので」衛星観測研究の今後の発展の方向性 ③ 「ひので」衛星と他観測との共同観測の可能性 ④ 宇宙天気研究への「ひので」衛星の貢献 ⑤ 「ひので」衛星を用いた太陽長期変動研究 ⑥ 次世代太陽観測に向けて また、9月7日の午後には、2つのグループに分かれてのexcursionと、その後、夜にはbanquetが企画されました。				

研究集会の成果	この会議は、参加者数(150名以上)に対して、口頭講演数が約40件ということからも分かるように、口頭講演は、招待講演を中心に時間をとって行われた。それぞれの招待講演者が、自身の研究だけではなく同分野の成果のレビューを行ったので、参加者全員が、「ひので」の10年間の成果をよく理解することができたと思われます。 特に、太陽黒点の微細構造と太陽コロナの加熱機構、太陽静穏領域の磁場構造とスピキュールのダイナミクス、太陽極域磁場の周期変動、プロミネンスの乱流と噴出、太陽フレアの発生機構と大規模不安定性、コロナ質量放出の発生や太陽風の源など10年間の「ひので」の観測に基づく最新の研究成果の報告については、質疑応答も活発に行われ、会議が盛り上がりました。 また、「ひので」の後に打ち上げられたSDO, IRIS, NuSTARなど様々な観測衛星との共同観測の成果や今後の計画についても議論が展開され、新たな太陽研究の可能性を展望することができました。新しい地上観測装置についても同様です。ポスターセッションでは、参加者の最新の研究が多数、発表され、ゆったりとしたスペースで活発な議論が繰り広げられていました。国内の大学院生も多数ポスター講演を行い、海外の研究者と積極的に議論できていました。 サマリーセッションでは、マックスプランク太陽系研究所所長のSami Solanki氏が、「ひので」が活躍したこれまでの10年、及び、これからの10年の太陽研究を展望する講演を行いました。今後の研究の進め方の参考になる講演でした。 次世代の太陽観測衛星計画SOLAR-Cの科学戦略を検討する国際研究集会 (SOLAR-C Science Meeting) も9月9日に実施され、ひので衛星の成果を基にした太陽物理学の新たな発展についても検討されました。特に、JAXA、NASA、ESAが現在協力して進めている次世代太陽物理ミッションに関する科学検討チームの活動について報告され、将来の太陽観測研究の方向性について多角的な議論が行われ、ひじょうに有意義な会議になりました。 この会議のまとめとして、招待講演を中心としてPASJ誌にreview paperを出版する計画であり、「ひので」の10年間の成果のまとめを行うという、この会議の当初の目的は、目に見える形としても達成される予定です。
その他参考 となる事項 (希望事項も 含む)	